

『都市をつくる風景 「場所」と「身体」をつなぐもの』

中村良夫 著

藤原書店・二六二五円

ISBN9784894347424

社会

「破れ障子」の街 再生への道

「風景」を手がかりにした、日本再生の書である。

著者は景観工学の第一人者であり、「風景学」の提唱者でもある。日常生活空間としての風景はそのまま、社会のありようを映し出す。風景を通して、心豊かな暮らしのある町づくり、国づくりの道を探る。

日本の風景は「破れ障子」のようになったという。西欧のあとを追う近代化は、一言でいえば生産力の向上だった。その結果が「いかにも薄っぺらな町並みの中で営まれる貧相な市民生活」であり、混沌（こんとん）とした今日の都市の姿を生んだ。

「国会議事堂の裏手に立ち上がった高層ビルが日本の民主主義を足蹴（あしげ）にした」「粘菌状の都市がついに融（と）けだして無限漂流を始めた」「赤くかぶれた皮膚病的景観が蔓延（まんえん）する郊外」……。ラジオ放送をもとにまとめられたこともあるだろうか、都市のイメージをふくらませると同時に、著者の嘆きの深さをもうかがわせる言葉が全編を通して

て並ぶ。

無理もない。かつては、自然の風情の中に生を営む山水都市が、西欧諸国の称賛を浴びた。明治には大きな構想力をもった風景があり、大正デモクラシーは町を輝かせた。

そろそろ「アジア的な精神文化のしなやかな活力と多様性を失わずに、西欧の合理性のみこんだ円熟」に踏み出す時だ。著者の指摘にうなずく。

英国では、繁栄にかげりが見えた前々世紀末に、アメニティー運動が盛んになった。風景やアメニティーのような文化の力が経済力にもまして持続性に富む国力の蓄積であり、そこに英国人は新しい豊かさを発見したのではないかと読み解く。

日本にとつても、文化の力がかぎを握ることは間違いない。市民の感性によってすぐれた都市文化を創造し、それによって未来を拓（ひらく）。希望は地方都市から芽生え始めたという。

では、この東京は、と思う。

「とどのつまりは市民が自らの人生の舞台である町づくりにどれだけ切実な思いを抱くか、だそうだ。明日を考えるスタートにしたい一冊である。」

評・辻篤子（本社論説委員）

なかむら・よしお 38年生まれ。東京工業大学名誉教授。専門は景観工学。

『裁かれるのは我なり 袴田事件主任裁判官 三十九年目の真実』

山平重樹 著

双葉社・二六八〇円

ISBN9784575302271

ノンフィクション・評伝

心ならずも書いた死刑判決文

時代は変わっても、冤罪事件は後を絶たない。本書に取り上げられた袴田事件も、その疑いが濃厚な事件の一つである。

1966年6月、静岡県清水市（現静岡市）でみそ醸造会社の専務宅が焼け、一家4人の遺体が発見された。捜査は難航したが、事件発生から1カ月半後に従業員の一部、袴田蔵が犯人として逮捕される。静岡県警は、1日平均12時間にも及ぶ厳しい取り調べを行い、その結果袴田は自白して、送検された。

ところが、裁判になると袴田は無実を訴え、警察のさまざまな捜査や取り調べが、明るみに出る。法廷で、矛盾だらけの自白調書45通のうち、44通が不採用になるという、異常な事態になった。にもかかわらず、袴田は最終的に有罪と認定され、死刑判決がくだる。

本書はおもに、その主任裁判官を務めた熊本典道判事の視点で、書き進められる。熊本判事は、個人的に無罪の心証を抱きながら、合議制で有罪と決定したため、心ならずも死刑判決文を起草するはめになる。